

## 第六部 黒衣の魔女

\*\*\*\*\*

まだ養父が健康で、ディーナザードとフウルウの仲が今以上に険悪だった頃、彼が『ちよつと出かけてくる』の一言で、唐突にアルヒマイナー帝都へ出向いたことがあった。

その時、色々あって、ディーナザードは猛烈に苛々していた。だから、思わず口に出してしまったのだ。

どうして、あの男をここに置いているの？——と。

それは『あの男を追い出して欲しい』と言ったようなものだった。同じ男でもフウルウとは違い、養父は他人の気持ちを察することに長けていた。確実にディーナザードの本音を読み取っていたらう。

だからこそ、養父は自分を穏やかに諭し始めた。

彼のアツザフル語は下手だな、そうは思わんか？

ディーナザードが笑いながら肯定の意を示すと養父は満足げに微笑んだ。

その通りだ。彼のアツザフル語は稚拙極まるな。……ところで、おまえは夏語シァユをどのくらい話せる？

義父の微笑みの前にディーナザードは少し口ごもった。習ったことがないので——と答えることで、一言も話せないという真実を和らげた。

お前は実に要領がいいな。ディーナザード。何をやっても上手くこなす。めったに失敗というものをしない。

彼はその逆だ。実に要領が悪い。彼は、何をやっても上手くはいかない。常に失敗を犯し、いつも私の手を煩わせる。

違いがわかるか？ そうだ。彼と違い、お前は上手くできないことには手を出さない。自分よりも上手くできる人間の側にいくことは決してない。必ず、自分よりも下手な者の側に行き、己の上手さを見せつけ、自分よりも上手いものが現れたら、己の下手さを隠すために、その側から遠ざかる。大人の遊び場に行けば、否応なく己の無力を見せ付けられる者が、子供の遊び場にあえて留まる。子供の遊び場に留まるにしては手足が長すぎる気もするがね。

そんな顔をするな、我が娘よ。

それが分を弁えるということだ。それができるお前は彼よりもよほど手がかからない良い娘だ。彼のような男は有り体に言って、傍迷惑だ。また、お前のアツザフル語の巧みさは、お前の努力の証なのだから、誇るべきことだよ。もつとも、不思議なことに彼は、彼の努力の証である自身の夏語の巧みさを誇らんがね。

……おそらく、それが育ちの差というものなのだろう。

彼は家族に恵まれ、金銭に恵まれ、産まれてきた。彼自身は忌み嫌っているようだが、それは間違いなく、彼を構成する一部だ。

躓いても、また、立ち上がればいい——彼を見てみると、しばしば、そういう気分させられる。わかっている。お前のような苦勞をしてきたものから見れば、彼のそういう部分に苛々させられるだろうからな。

一度でも、他者の失望を買えば、口減らしに捨てられることもある。一度でも、勝負で

失敗を犯せば、食い扶持を失い飢え死にすることもある。

そういう世界に生きてきたお前のような人間は、何事においても慎重になるものだ。

彼のように努力し挑戦できるのは、失望を買っても手を差し伸べてくれる家族や、失敗を犯しても飢え死にをしないだけの金銭を持つものだけだ。

無論、彼はやや極端だがね。少なくとも、私はディーナザード・ビントⅡヌーフ程倒れることを恐れ、そしてまた実際に倒れない者も知らず、ピャオ・フウルウ程倒れることを恐れず、そしてまた実際に倒れる者を知らない。

だが、いずれは彼が勝つさ。何故なら、何度負けようが、勝つまで、勝負を辞めないのだからな。勝つまで勝負を続けられれば、勝利は必然だ。

雨が降るまで続ける雨乞いの儀式のようなものだ。期間が限定されない予言など外れるわけがない。

——逆に、物事を斜めから見ることしかできないあたしは、いずれは負ける勝負を続けているに過ぎないかと？

……安心しろ、大概の人間はその『いずれ』が来る前に寿命を向かえる、この私のような。だからこそ、お前は賢い娘だと言っているのだ。そうだな、さしずめ、おまえは『智叟』で彼は『愚公』なのだよ。

だから、あたしを彼に引き合わせたの？——と尋ねると、養父はそれについては口を閉ざした。その代わりに言葉を補った。

彼が他者への自然な思いやりを抱けるのも、同じ理由からだな。彼自身はどう考えているからはわからないが、彼は金銭なきが故に己が家族に捨てられるなど想像もしていない——そういう勘違いができるのは、彼のように恵まれた生まれの者だけだろう。

しかし、世界は残酷だ。

時代を前に進めるのは、往々にして、ああいう男なのだよ。



結局フウルウはわずか一年でアツザフル語をほぼ完全に習得した。思考言語すら自在に切り替えられるようになった。会話においては発音の面でまだ多少の違和感が残るものの、読み書きの面では、既にディーナザードでは太刀打ち出来ぬ領域に達している。

そのことを認めざるをえなかった時、ディーナザードは悟った。

養父はディーナザードにフウルウを引き合わせたのではない。

養父はフウルウにディーナザードを引き合わせたのだ。

結局ディーナザードは娘でしかなかった。多少優れたところがあったとしても、最後の線で、言わざる行わざるが故の矛盾なき冷笑家でしかなかった。フウルウに大学行きを進められたのを断ったのも、自分の限界を知ることが恐れていたからだ。きっとそれを養父はあの優しい目で見透かしていたのだろう。

しかし、フウルウは違う。彼は大言壮語を放ち、暴虎馮河を犯す矛盾だらけの革命家だ。今なら、わかる。養父にとって、フウルウは息子であるだけでなく、後継者でもあったのだ。

鶴は語った。他人の喜びを己の愉しみとし、他人の悲しみを己の苦しみとする人間。

父は語った。真の大人、古の君子、道の上を往く者——いずれ、時代を前に進める人間。どうも、ピヤオ・フウルウはそういう男らしい。

\*\*\*

アル・イクシルは杖を縦に一振り、何もない虚空を切り裂いた。

すると、白く輝く六対の翼は大きく羽ばたき……賢者の首から下を包み込む。

そして、アル・イクシルの顔から神化粧が薄れ、消えていく。それと共に六対の翼の光も薄れていった。だが、神化粧と違い、翼はその姿を消すことはなかった。むしろ、消えていくのは淡く儂い光だけであり、その翼の形はより明らかなものへとなっていった。いや、輝き故に形が定まっていなかった時、《翼》に見えたそれは、そもそも、《翼》ではなかった。はためくことをやめ、輝くことをやめたそれは翼というよりも、賢者を包み込む白き衣であり、無地の外套であり——。

「……『召喚』の原理はさっぱりですが……それが素体になっていた——と？」

思わず口に出したフウルウ。彼は黙って吹き飛んでいたさらしを拾い、再び手足に巻き出していた。

「ウルルの最下級探求士在学証明——純白の外套、すなわち、白衣の賢者の由来たる神御衣……で、よろしいのですね？」

そこまで口にする、彼も観念したらしい。肩を竦めて白状し出した。

「結局、僕はこれより上の階位にあがることは出来なかったからね。彼女と違って、僕は探求士として、生涯三流だった」

きゅつきゅつと手足のさらしを巻き終わった辺りで、彼は口を尖らせた。

「でも、あまり最下級最下級言わないで欲しいな」

「これは失礼。では、改めて」

フウルウは左の掌に右の拳を打ち付け、深々と頭を下げた。

「あの娘の非礼——深く、陳謝致します」

「ああ……いや、いいんだ。僕も調子に乗り過ぎた」

はっと思いついたようにアル・イクシルは、慌てて、言葉を返した。そこには自分のせいで二人に亀裂が生じたのではないかという不安が垣間見える。

『『上から、見下して』かあ。考えてみれば、昔は僕も阿翦——君らにとっての女媧娘々へ似た台詞を吐き捨てたんだよ。……僕はあの娘ほど、賢くなかったから、見下されていると気付くまで時間がかかったものだけだ』

そう言って、アル・イクシルは己の髪をくしゃくしゃとかき回した。

「いや、あの娘は阿翦ではない。わかつてはいるんだけど、同じ顔に同じ声に同じ髪に同じ服だからね。つい、阿翦と話している気になって……」

「似ているのですか？ 私は女媧娘々をもっと妖婦然とした女性だと考えていたのですが……」

「おいおい、僕にも阿翦にも子供の頃はあったんだよ。まあ、たしかに性格は全然違う。似ているのは容姿だけだな。……しかし、僕も齢を重ねたものだ。昔なら、あの手の冗談はとても言えなかった」

「……それって……」

「彼女が沈黙している以上、真実はあの娘の中にしかないさ。まして、あの娘は僕の言葉に耳を傾ける事はないからね」

「……要するに話したくないんですね」

「いずれにせよ」賢者は少し早口になる。「あの娘があそこまで怒るとは思わなかった。ごめん」

「鶴にはちと酷でしょう」

「うん。あの娘はまだ幼い。しかし、それを鑑みると、さっきのはちよつと厳し過ぎやしないか？」

思わずフウルウはアル||イクシルの足元を見つめた。鶴の《緩慢なる皆既食》に挟られた大地。臭いすら変わり果てた生ゴミ。彼自身は無傷なので現実感がないが、あれは決して、夢幻ではない。アル||イクシルは初対面の鶴に問答無用で殺されかけたのだ。

自分を殺そうとした相手にそこまで寛容になれるのは単なる間抜けでは？ またしてもフウルウは失礼なことを考えた。あるいは、このように失礼なことを考えさせるのが、彼の特質なのかもしれない。

しかし、

「傲慢かもしれませんが、私は鶴の保護者のつもりです」フウルウはきっぱりと口出しは無用と伝える。「それにあの娘は頭のいい娘です。落ち着けば、私にひっぱたかれた事の意味を理解できるでしょう」

「……まあ……なんとというか……」アル||イクシルはどう言い繕うか迷った挙げ句、結局、素直に、「意外と親馬鹿だね」

「知り合いの小娘にも言われましたよ」

自分が『親馬鹿』であるのは意外な気もしたが、また同時に、当然な気もした。

「ただ、あえて弁解させてもらえれば、あの娘は私が馬鹿になれるだけに値する女の子なのです。あなたが絡むと途端におかしくなりますが、それ以外では本当にいい娘なんです。何年か教師をやっていますが、私は今までの歳であれだけの女の子を見たことがない。いえ、歴史上のいかなる少女も鶴には遠く及ばないでしょう。そもそも、あの娘は……」

「……ピヤオ殿、それ以上、言わない方がいいと思う。あなたに対しての評価を改めたくなってくる」

熱く語ろうと拳を握って、声を昂ぶらせていたのに、何故かアル||イクシルは苦渋に満ちた声で制した。

「そうですか」フウルウは肩透かしを食らった。「でも本当にあなたのこと以外では素晴らしい女の子なんです。女媧娘々は色々と問題があった人間の様ですけども、母親としては一流ですよ。……私がもう少し大人なら、手を上げずに鶴を叱る事もできたでしょう」

「今、女媧娘々が母親だって言ったよね？」アル||イクシルは何気ない一言に食らいついた。「で、女媧って阿翦の号だよ。なら、やはり、彼女は阿翦の娘なの？」

「さあ、ただ、少なくとも、鶴は物心ついたとき、既に彼女の弟子だったそうですから。育ての親であることは間違いないですし、生みの親でもあるかもしれません」

「なるほど、道理で似ているわけだ。いや、似過ぎだな。やはり、あれは分枝体かい？ あ

の神憑りカムガカリを考えれば、それだけではないだろうが……」

フウルウは一瞬聞き逃した。しかし、そこに含まれている情報に重大な意味に気が付き、先程のアルⅡイクシルと同様に食らいついた。しかし、彼とは異なり、フウルウの声には恐怖があった。

「あの、今、『分枝体』と仰られましたよね？」

「うん、それがどうかしたの？」

「いや、その……『分枝体』って——ひよっとして鵠のことですか？」

「そうだよ」

あっさり答えるアルⅡイクシルにフウルウは少しふらふらした。

「ちよ、ちよっと待っててください。草木や野菜じゃあるまいし、そんなことできるんですか？」

「できるよ」さらりと、アルⅡイクシルは言った。「未受精卵に紫外線でもあてて核を壊してから、体細胞から取り出した細胞核をその未受精卵に送り込めばいい。そうすれば、その卵は、どんどん分裂しはじめて、分枝体が一丁上がりだ。僕も蛙の分枝体の作成に一度だけだが成功したことがある。まあ、今の精霊密度じゃあ、あの頃ほどの精霊補助が期待できないから、もう無理だろうけど」

「それは両生類ぐらいまでの話でしょう？ ヒトのような哺乳類は機能分化も……」

「……入り組んでいるから、できっこない。体細胞の全能性は既に喪失しており、そこからの分枝体製作は不可能。僕もそう思ってたんだけどねえ」

ところが、女媧娘々はそれに成功しかけていたらしい。

どうしてそんなことをアルⅡイクシルが知っているのかについては不思議ではなかった。おそらく、女媧娘々本人から聞いたのだろう。後期の彼女は研究結果を一般に公開するとは少なくなつたが、意見を求め、知り合いの探究士と話し合うことは多かったという記録はある。

そして、その意見を求められたアルⅡイクシルによると、彼女は体細胞の全能性復活の足がかりを既に掴んでいた節があるという。

実は乳腺細胞辺りは、一旦、意図的に——たとえば、飢餓状態に追い込んだりして——その活動を停止させ、その後で電気で衝撃を与えると、細胞中の全ての遺伝子が活性化することがある。そのことを彼女は実験で証明していた。アルⅡイクシルにしてみれば、それだけでも、驚きであったが、女媧娘々には満足できる成果ではなかったようだ。より洗練された手法があるはずとこぼしていたらしい。

ここから先は推論になるが、おそらく彼女は、そうやって手に入れた全能性が復活した自分の細胞と、蛙と同じように用意しておいた自分の卵細胞を、何らかの手段、おそらく例によって電気による衝撃で合体させ、受精卵と同じ状態にしたのだろう。あとはこれを分裂させ、成長させ、代理（ひよっとしたら、代理ではないかもしれないが）母の子宮に着床させれば、女媧娘々の分枝体としての鵠が誕生する。

「やっぱり、彼女は天才だよ」アルⅡイクシルは冗談めかして、「顕微鏡見ながら細胞を切り張りするなんて、不器用な僕にはなかなかできない」

「そういう問題ですか？」フウルウは一瞬、目の前の男を殴り倒しそうになった。「私はその分野については素人です。だから、詳しいことはわかりません。ですが、仮に尋常なら

ざる技術革新と濃密な精霊使役による補助があったとしても、ただ外界にさらすだけで破損する遺伝子を、そんなに乱暴に扱っていたら、遺伝子に文字通り致命的な傷がつく可能性が……成功率はそんなに高いんですか？」

「下手な鉄砲も数を打てば当たるということだろう」アルルクシルは賢者の顔付きで答えた。「代理母になった人間が一人とは限らないし……酷い言い方だが、未開地であり、人の命の値段がそれ程高くない《根の国》ならば、その過程のさまざまな問題もさして苦勞なく処理できる」

「……今、私が何を考えているかわかりますか？」

「こういうことを平然と語る僕への評価を改めるべきと考えているのだろう」アルルクシルはしばし瞑目して、「弁解するわけじゃあないが、こういうのは慣れだ。彼女と付き合えば、人間というのが、そういうものだとはよくわかる。残念ながらね。故にこそ、道徳というものは理性ではなく、感性に基づくことが善しとされる風潮があるのかもしれない」フウルウはせせら笑いたくなった。なるほど、故郷の年寄り連中はそういった意味で正しかったということか？

「勿論」アルルクシルはフウルウの笑いの理由について尋ねなかった。「この方法で出産に成功しても、重大な先天的疾患が出る可能性が極めて高い……」

フウルウの脳裏にディーナザードの言葉が今更ながら蘇る。

——汗を拭こうと思ったら、妙なしこりが有って。

あれは鶴の中にあった《夔》の端末。鶴が効率よく使役するために、そうしていると思っ込んでいたが……。

「気付いたかな？」

「……そのための《夔》であり、傀儡たる私であり、あの化け物じみた干渉力……すべては鶴を支えるためにあったんですね」

もしも、鶴に致命的な先天的疾患があるならば、それは《夔》の端末で補完されているのだろう。傀儡化で自分の重大な破損箇所を修復できたのはその余技だ。さらに、鶴が恒常的に《夔》で干渉力を一定増幅していたのは、間断なく医療用巫術を自分の体にかけて続けるためかもしれない。ならば、鶴はフウルウよりもはるかに《傀儡》であるといえる。

「まあ、可能性の一つでしかないし、そんなに単純な問題でもない。しかし、一つの技術は常に複数の技術に支えられ、その一つの技術もまた複数の技術を支えているというさ。もつとも、技術に限った話でもないが」

「……しかし、そのことを鶴は自覚しているのですか？ 少なくとも、そんな素振りはまだ見えなかった。私に隠していたとも考えられますが……」

「あの女のことだ」アルルクシルの声には薄い怒りの色があった。「物心つく前に『刷り込んだ』可能性が高いな」

「……では、ちよっと、性格がズレているのも、女媧娘々の計算づくと？」

「多分ね。そっちの方が都合がいい」

今まで、鶴の話に出てくる女媧娘々と歴史上の女媧娘々の姿は、フウルウの中でどうにも一致しなかった。だが、彼の話で、徐々に一つに重なり始める。アルルクシルが忌み

嫌うのも理解できる。

「しかし、にわかには信じがたい話です」フウルウの声は少し震えていた。「まあ、いくつもの仮定の上の話ですから、あっさり信じてはいけませんよ……」

「そう？ まあ、あっさり信じるのは確かによくないと思うけれども、僕にすれば、君の驚きの理由はわからないな。二百年前の阿翦の弟子である鶴に、あの《夔》。いまさら、分枝体なんて、驚くに値しないだろう？」

それは微妙な問題だなとフウルウは思った。分枝体は現実味があるからこそ、驚いているのだ。女媧娘々の長寿や《夔》については、現実味が薄すぎて、その存在に驚くことすらできない。

また、ある程度の知識がある分枝体については技術的な質問ができるが、まったくの未知の領域である《夔》に関しては、具体的な疑問を挟むことができず、そこにあるというだけで納得せざるをえないという一面もある。

「人間というものは、あまりにも自分の理解から遠く離れたものに対してはしばしば思考の停止に陥るといふことでしょう。しかし、一度理解できる見込みが出てくれば、思考を躊躇することすらできません。実を言うと、あの《夔》を作るときに必要なはずの干渉力の不足がずっと気になっていたんですよ。今日、あなたの《杖》を見て、これを基に《夔》を作ったんだなって、思いました。でも、そうすると、この《杖》は一体なんなのだろうと、考えて……まあ、人間はそうやって一步一步進んでいくものなのでしょうが」「うんうん」

「でも、精霊は違う。よく考えれば、我々の社会の根幹を為している《精霊》そのものについて、私はそれほど疑問に思ったことはなかったのです。あれはほとんど正体不明だつて言うのに……あまりにも理解の及ばぬことは果てしないのに」

「……………」

何故か最後の部分にアルイクシルはやたらと驚いた。

……ようだが、すぐに平凡な一言を返した。

「理解し易いものから理解していこうというのが現実的な態度さ」

「ですか、あえて、問いましょう。これまでのあなたの言葉も鑑みるに……やはり、あなたは、かつてのウルル所属最下級探士にして、スリーハイリーチャハライアルーアーム・ムラト・アプヤド流浪の四仙《白衣の賢者》アルイクシル・デアウス殿ですね。アツザフル暦前六年生まれにして、今年、二百……」

「概ね、その通りだよ」

と、彼はそこでフウルウの言葉を断ち切った。しかし、その後、ふと思いついたように「……ああ、この言い方には疑問はいくつもあるだろうが、諦めてくれ。正確さを追及すると、話に切りがなくなる」と付け加えた。

フウルウは——なるほど学者だな——と思った。人の世に真理などない。真理の探求者たる彼らはそれが身に沁みてわかっている。だから、断定というものをまずしない。断定できるほど確かなものなど、ありえないのだから。しかし、条件やら留保やら仮定やらを使えば、そこへ近づくことはできる。だから、彼らはそれらを用いて語る。

その結果、回りくどい言い回しが出来上がってしまう。ディーナザードのような人間が唾棄する所以だ。フウルウもあまり人のことは言えないが……。

「では、とりあえず、一つ、聞かせて下さい。私にはあなたが百を超えているようには見

えない。せいぜい四十前だ。加えて、人は多めに見積もっても百二十歳を超えるのは不可能だと思っていました。が……本当に《不老不死の霊薬》でも作りましたか？」

「作ったのは阿翦の方さ」

彼は平然とフウルウが抱いていた疑問に答えた。

「多分ね。いや、正直、人工冬眠などを利用していた可能性も考えていたが、口ぶりからすると阿翦が《不老不死の霊薬》を作ったとピヤオ殿は考えているようだ。ならば、おそらくそれは正しい。もともと、不老であるだけで、不死とはなれないし、後天的遺伝子操作を含めた総合生理調整技術を『薬』の一言でくくるのには抵抗が強いけれどもね」

「つまり、少なくとも、それらの技術を以って、女媧娘々は不老化に成功したと？」

「これまた確証に欠けるがね。僕も驚いている。一応、これも案自体は彼女から聞いたことがあったんだけど、完成よりも先に寿命が尽きるか、その技術を支える精霊が足りなくなると考えていた。しかし、彼女の才覚はすべてを超越していたということか……」

空を仰いだアル||イクシルは感慨に震えているようだった。

「恐るべしは黒衣の魔女だな」

\*\*\*

誰もいない山中を黒衣の鶴がとぼとぼと歩く。アル||イクシルの農園周辺の小さな山の一つには、背の高い木々が茂っていた。

鶴は一人だった。

「……フウルウさんの馬鹿。フウルウさんの馬鹿。フウルウさんの馬鹿。フウルウさんの馬鹿。フウルウさんの馬鹿。フウルウさんの馬鹿……」

鶴は呪詛を繰り返していた。

「……フウルウさんの馬鹿。フウルウさんの馬鹿。フウルウさんの馬鹿。フウルウさんの馬鹿。フウルウさんの馬鹿。フウルウさんの馬鹿。フウルウさんの馬鹿……」

一瞬、視界が歪んだ。もしかして、さっき急に大量の精霊を使用したから、体に負担がかかっているのか？ いや、あの陰湿で嫌らしい性格のアル||イクシルがわたしにこっさり何かしたとか？ ひよっとしたら、フウルウさんにひっぱたかれた時に……？

様々な可能性を検討したものの、自己診断の結果は……異常なし。単に……、

「わたし、泣いているんだ」

瞳を潤ませることは何度かあったが、ぼたぼた零れ落ちるほどに涙を流したのは、お師匠様が……永久の眠りについた時以来だ。フウルウさんがいなくてよかった。

——……何で？

眉間をひっぱたかれたのだ。涙腺が緩むのは純粋な生理現象ではないか。何も恥じることはない。それとも、この涙はそれ以外の原因で流れているのか？

「……わたしはあの人に嫌われたのが辛いのか？ 涙を見せたくなかったのか？」

なるほど、確かにフウルウさんに嫌われたのは辛いだろう。あの人は自分にとって、大切な人だ。目の前のアル||イクシルに躍起になって、酷いことを言ったり、したりしてしまった。悔やむ気持ちもある。でも、やっぱりおかしい。本当なら、フウルウさんに嫌われても、お師匠様の仇を討つべきではないのか？ 辛くても、お師匠様の仇討ちを優先す



るのべきではないのか？ いや、屍血山河を築いても、世界の全てを敵に回しても、お師匠様の仇討ちをするつもりだったのだ。フウルウさん一人がああ憎きアルIIイクシルに寝返ろうとも、痛切に感じないのが本当なのだ。

「わたし、お師匠様の仇討ちよりも、フウルウさんに嫌われるのが辛かったの？」

——…何で？ どうしてよ？ おかしいじゃない…。

鶴は訳がわからなくなった。心の中にあるものを吐き出して、誰かの胸で思いつきり泣いてしまいたい。そうだ。例えば、あの金色の双眸を具えたあの人の胸で…、

——ディーナザードさんに会いたいな。

「…何て節操がないんだ。わたしは…自分を構ってくれる人間なら、誰でもいいの？」  
確かにディーナザードは師母に似ているところがある。時々、自分の肢体を舐め回すかのように見ている時の表情とか…あと、あんなところやこんなところ…などは、そっくりだった。しかし、彼女は彼女、師母は師母である。自分は身も心も師母に捧げるのだ。どうして、いまさら他の人間に寄り添っていくことができよう。

「きやつ」

ドタン——と、鶴は思いつき大地に頭突きした。いや、正直に言おう。転んだのだ。しかも、自分の伸びた髪に足を引っ掛けて。今までは、大気中の精霊に干渉して、土や足に触れないようにしていたのだが、集中力が切れたのだ。こんな簡単なこともできなくなるくらい心が乱れている。踏んだり蹴ったりだった。もう死んでしまいたい。でも、死ぬ前に《夔》で髪を切ろう。そうすれば動きやすくなる。そうして、鶴が髪に手をかけた瞬間…、

「見つけたぞ。黒衣の魔女」

謹厳なる声が辺りに響いた。

\*\*\*

「では…」一呼吸置いて、フウルウは最大の問題に触れた。「鶴はあなたを女媧娘々の仇だと主張していますが、何か弁明は？」

「弁明はない」

二人の間に緊迫した空気が横たわり——、

「何せ、心当たりもないんだ。というか、あの娘が来るまで、とつくに阿翦は寿命でくたばっているものだと思っていた」

——すぐに弛緩した。

「ああ、そうだ。忘れていたから、確認するよ。阿翦は死んだんだね」

「はい。鶴によると、半年前に」

「そうか、そうか」

それは『ざまあみろ』という口調だった。フウルウは少し気に障る。もともとアルIIイクシルの方もそれに気付いたのか、「疑われるような態度をとっているが、僕は無実だよ」と弁解を始めた。

「だって、そうだろう？ 阿翦の主観時間で百五十年以上、僕は彼女と接触していないんだ。殺害なんてできっこない。仮に接触しても…僕に彼女を殺すことはできない気がする

るしね」

「では、誤解だと？」

「ひよっとしたら、知らないうちに、間接的な原因になっていくかもしれない。でも、それは僕の意志の及ぶ所ではないし、責任をとるつもりもない。むしろ、彼女の行動の方がよっぽど非難されるべきではないかね？」

「フウルウは沈黙を以って肯定を示した。」

「そもそも、彼女の最後はどんな感じだったの？」

「アルⅡイクシルの言葉に間違いはなかったが、最後の分のわくわくした口調がやはり少し不謹慎だった（まあ、相手が相手なのでフウルウもけちはつけなかったが）。」

「鶴曰く『見掛けや振る舞いは変わられなかったのですが、だんだん睡眠時間が長くなつて、脈拍や呼吸などが徐々に弱くなつていき、最後にわたしに遺言を残した後、静かに息を引き取られました』と」

「おいおい、それは普通『老死』と言わないか？」

「一般的な肉体の老衰は見られないが、他殺の可能性は低いとアルⅡイクシルは断じる。」

「はい。私もそう思っていました。そもそも、鶴の証言には時間的矛盾などがあります。」

「ただ、二百年以上生きた女媧娘々が突然死ぬというのは……」

「言つたらう？ 肉体的不老と不死は違うんだよ。結局、老死は避けられないさ」

「アルⅡイクシルによると、それはこの研究を齧つた者は誰もが一度辿り着く結論なのだという。肉体の老化には様々な要因が絡む。しかし、その回避は——容易ではないが——単純ではあるという。要するに、『取り替えればいい』らしい。言われてみれば、その通りで、義足や義手の原理を、精巧な生体部品で、すべての器官に応用すればいい（その目的を長寿ではなく、白兵戦としたのが、傀儡であり、フウルウなのだ）。女媧娘々は精霊を使った遺伝子操作と薬物処理による細胞段階での『取り替え』を目指しており、可能性自体はアルⅡイクシルも期待していたという。ただし、どうしても原理的に取り替えられない部分がある。神経系、脳——もっと正確に言えば、精神、人格そのものだ。なるほど、腕がなくなれば、義手をつける。性能は低いが代わりがあるのだ。しかし、脳はそうはいかない。脳がなくなると体が死んでしまうというだけでなく、仮に体がそのままでも心が死んでしまえば、それは生ける屍——それこそ傀儡になってしまうのだ。これは細胞段階でも同じことが言えるらしく、新陳代謝をする神経細胞は人格維持に甚だ不都合らしい。結局、脳だけは不老処置を施すわけにはいかない。そんなことをすれば、発狂する可能性が極めて高い。確かに感覚的にも無限に蓄積する経験情報というのは不健康だ。鶴の『お師匠様の肌はお美しかった』という言葉も鑑みれば、女媧娘々が脳以外を若いままを保っていたのは確実だろうと、アルⅡイクシルは言う。しかし、脳は着実に老いていったのだ。」

「まあ、『夔』を見る限り、精神の不老化処置を完全に諦めていたというわけでもなさそうがね。あれにはその研究の技術が応用されているみたいだし。また、この辺りの研究が『鶴』の礎となっているのだろう」

「体が若いまま脳だけが老いるとどうなるのか？ 推測はできるが、実例がないため、憶測の域を出ないという。ただ、無理が祟つて、結局、死ぬか、『状況に死ぬことを強制される』のは間違いなく、その一つの形が女媧娘々の死に様だったらしい。」

「あるいは、下手なことをする前に体のどこかの機能を狂わせて、『自殺』したとも考えら

れるけれども……いや、バックアップとしての鶴がいる以上、最後の賭けに出る前に自殺することもないか」

「……バックアップ？」

「脳の予備だよ。肉体付きのね」

その言葉にフウルウはゾクリとした。背筋が凍るといふのはこういうことを言うのかも知れない。

「これも《夔》との関連でね。まず、あれにはある種の疑似人格——『魂』が封印されている」

「鶴の証言もそれを裏付けています」

「つまり、阿翦はその手の技術をどの程度かはわからないが保有している。だから、その技術で、自分の分枝体に自分の人格を複写しようとした……」

「し、しかし……」

フウルウはそう言いかけたものの、なかなか言葉が続かなかった。実に、彼の意見には説得力がある。人間の脳は《夔》のような精霊結晶とは違う。そんな簡単に書き込めるだろうか？ いや、逆に言えば、《夔》のような精霊結晶と違い、初めから人間の脳には人間の人格を受け入れる準備がそろっているともいえる。まして、鶴は干渉力が強い。精霊に深く干渉するということは、精霊に深く干渉されるということでもある。アル・イクシルの言っていた《神憑り》の人格乗っ取りの話もある。おまけに《夔》を中継することにより、鶴は精霊からの受信性を高めている（だから、フウルウの生理状態をあんなに簡単に把握できる）。さぞや、書き込みやすいだろう。しかも、若い脳へ魂だけを移すのだから、脳の老化の問題すら克服できる可能性がある。勿論、問題は多く、保証は少ない。しかし、人間、確実な死が眼前に迫れば、危険な手術も承諾するものだ。成功以外に生き残る道はないのだから。まったくもって、いい事尽くめに思える。

——鶴本来の魂がどうなるのかという問題を除けば。

「……しかし、それはすべて憶測ですよね」

「本人が言っていたんだよ。不老不死を目指すための陳腐で有効な手段の一つだとね」

そのアル・イクシルの声がフウルウには異様に冷然たるものに聞こえた。

「当時は処女懐妊なんて彼女らしいと嘲笑していたが、冗談だとも思っていなかった。そして今日、あの娘の顔と声と《夔》を見て、そのことを思い出した。そもそも、明確な目的もなく、子供嫌いのあいつが子供を、しかも、数多の技術的困難を乗り越えて分枝体を作る理由はないだろう」

フウルウの身体は『子供嫌い』という言葉に小さく震える。

「勿論、二百年近く生きていけば考え方も変わるだろうし、証言以外は状況証拠しかない。憶測と言われても仕方がないが——しかしね、彼女は有限実行を旨としている。遠大なる目標を放言するのは熟慮と準備を重ねた上で、決意を固めた時だけだ。気まぐれで当初の予定を変更するような人間ではない。おまけにこの案には技術的にも有効性がある」

アル・イクシルの言は確信に満ちていた。フウルウもしたくもない納得をしてしまう。

「ついでに言うと、あの娘の激情が祝融殿の語った昔のイナウ、あるいは昔、阿翦が飼っていた雌奴隷に似ていることも気になるんだよ。既に彼女には他者の人格が試験的に挿入されているんじゃないかという気がしないでもない。だから——まあ、この言い方は正確

じゃないんだけど——彼女は僕らが獲得した擬似人格精霊形成因子を持っているんじゃないかな？ まあ、これらもすべて、本人に自覚があるとは考え難いけれどもね」

さらにアル||イクシルは、鶴の《夔<sup>クイ</sup>》が『闇色の大鎌』の形状を取っている理由も説明した。鶴の師母が使っていた無支祈システム搭載型女媧泥ユニット一号体である《夔<sup>トウ</sup>》も実は似たような『闇色の大鎌』の形状を取っていた（故にアル||イクシルは勘違いをしたらしい）。それは今アル||イクシルが用いた藜杖《カムヌ》や、かつての勇者フアテイマや勇者チーシュイの用いた霊剣《ナーガールジュナ》と同質の存在である——斧鉞《テスカトリポカ》の形相を模倣した結果だという。ただし、素材に女媧泥ユニットを使っている分、機能はともかく外観には大きな差異が表れ、『斧鉞』ではなく『大鎌』になっているのだと——。

「では、女媧娘々は初めから己のための生贄として、鶴をこの世に産み落としたと？」

「勿論、状況次第という側面はあったろう。実際、あの娘は生きているんだから。でも、あの娘の阿翦への異常な心酔からすれば、阿翦のためなら喜んで身も心も捧げるんじゃないかな？」

「……」

『大体、君は女媧娘々が死ぬといたら、死ぬのか？』

『当たり前ですっ！』『わたしの心も体も全てお師匠様のものです！わたしはお師匠様の為に生き！お師匠様の為に死ぬのです！』

——……あれはこういうことだったのか？

「しかし、阿翦は何らかの理由で、自己の人格を鶴に移植することを止めた。技術上の問題が発生したか、阿翦の脳の老化、あるいは精霊密度の低下が早過ぎて人格の移植が間に合わなかったとか……」

フウルウはそんな話を信じたくなかった。フウルウは鶴を信じたかったし、鶴を鑄造した女媧娘々を信じたかった。だから……。

「あの……」

だから——一つの仮説を考え出した。

「……好きになったからというの考えられないでしょうか？」

「はあ？」

「いや、つまりですね。最初は自分の複製のための道具としてしか見ていなかったけど、鶴を育てているうちに情が湧いてきたとか」

「それは絶対がない」アル||イクシルは断言した。

「なんだか、こういう思い込みの激しいところは鶴に似ているな——とフウルウは思った。あるいは……。」

「いや、微視的な自己保存よりも巨視的な自己保存を選択したとも考えられるか……」

「よく意味がわかりませんが……」

「ええと、僕が十代の頃に書いた情報学に関するただ一つの論文は読んだかい？」

「申し訳ありません。畑違いの論文は全て見通す余裕はありませんし、学者としてのあなたの評価は…………」

「ああ、だろうね」愚者を名乗る賢者は苦笑した。「つまりね、ある情報を複製する時に完璧な複製というのは望むことはできず、むしろ一定の変化があった方が中長期的にはより完全に近い複製になるというものなんだ。つまり、……ええと、とどのつまりこの世に男と女がいるのと同じ理由」

「『死』の獲得。多様性とそれに伴う進化の促進、さらにそれらから芽生えるより確実な自己保存ですか？」

「うん。どうせ、直接、自分の人格を複製したとしても、どうしてもそこには情報の劣化があるしね。それよりむしろ、一度、教育的な言葉や日常的な振る舞いといった文化的因子の形で自分の意思、もとい遺志を、より練磨し、より純化し、より高度な状態で抽出し、己の存在をもっと大きな視点から残そうとしたのかもしれない」

「……それって、普通は『子育て』って言いませんか？」

「あるいは自分よりも鶴の方が生き残るべき存在だと考えるようになったのかも」

「……それは『親の愛情』というやつでは？」

「君、やけに阿翦の肩を持つね」

度々のフルウの指摘にアル・イクシルは露骨に不機嫌になる。

「だって、阿翦なんだよ。あの阿翦なんだよ。あの阿翦に『子育て』や『親の愛情』といった概念を、どうやって結びつかせる？ 少なくとも、僕にとっては無理だね」

そう言って、彼は子供のように頬を膨らませた。どうやら、彼の彼女への想いには並々ならぬものがあるようだ。

「……しかし、何故、女媧娘々は鶴にあなたに殺されたと言ったのでしょうか？ 女媧娘々が何か誤解していたと考えるべきでしょうか？」

「………仮説ならあるが、聞くかね？」

「ぜひとも」

「多分……嫌がらせじゃないかな？」

「は？」

「いや、僕に対する当てつけかも」

「……はあ、そんなことのために、こんなことを？」

「こんなことになるとは考えてなかったと思う。阿翦だって、全能ではない」

「それにしたって、年端もいかぬ少女にでたらめ言って、仇討ちをさせますかね？」

「だから、あいつは人の嫌がることは何だっけする女なんだって」

その断じる口調にフルウはふと微笑ましい気分になった。

——やはりこの人は鶴に似ている。いやむしろ、鶴が似せて作られたと考えるべきかもっとも、そのことはアル・イクシルも鶴も、あるいは女媧娘々ですら、認めないだろう。だが、フルウは別の点で抗弁せざるをえなかった。

「鶴の師母殿はそのような女性ではありません」

「ほう、ではどのような理由で、彼女は己の分け身を僕に送ったのだと？」

フルウが己の考えを伝えた時、アル・イクシルは探究者にあるまじき態度を見せた。

「馬鹿な馬鹿な馬鹿な、そんなことある筈がない！ だって阿翦なんだよ。あの阿翦なんだ

よ！」

「そんなこと言われても、私は女媧娘々を直接は知りませんし……」

「それでも、あいつの性格は有名だろう！」

アルⅡイクシルは怒鳴りつけるようにまくし立てる。

「大体、なんで、さつきから、君はそんなにいい方にばかり解釈するんだ？　これから先、君はあの鶴とかいう娘とずっと付き合っていかなければならない。勝手に君の性格を決め付けるのは気が引けるが、あえて、言わせてもらう。君は根っこの部分で身勝手だ。好きでもない人間のために気を使い続けることに、多大な苦痛を感じる。違うか？」

フウルウはその言葉には抗えなかった。彼の言葉は確かな事実だったからだ。

「阿翦のせいで、君はこれまで、そして、これからも大変な苦勞をしい込むことになるんだぞ」

「……そういえば……、そうですね」

「だろう？　おかしいじゃないか？」

「多分、鶴に会えたことで、全部チャラになったんですよ」

アルⅡイクシルは大口を開けた。そして、呆れた様子を隠すこともなかった。

「失礼だが……どうしようもない親馬鹿だな。君は」

「正直、自分でも意外です。私はあなた以上に親不孝をした人間ですし……」

「へえー、それはもの凄いい親不孝だね。うん」

できれば否定してほしかったが、自分の感慨に自分で水を指すこともあるまい。フウルウは黙って言葉を続けた。

「自分では、薄情で、冷淡な男だと思ってたのですが……」

「君の自分に対する評価は適切ではないのだろう。……ついでに彼女についてもね」

「こたわりますね」

「当然だよ。そりゃ、僕みたいな三流なら、確かに途中で情に邪魔されて計画を中止するかもしれない。でも、あいつは間違いなく一流の探究士だ。決めたことを貫くさ。——あいつは俺みたいな駄目人間とは違うんだから」

最後の一言は履き捨てるような言い方だった。アルⅡイクシルは今や藜の杖にしか見えない《カムヌ》を強く握り締め、「そもそも」と語り出す。

「僕がこんな忌むべき奇跡をばら撒くのは——己の無能や非才といった仮定や過程を超越した必然ならざる結果を求めているからだ。そうでなければ、俺のような人間には何一つ事を成せない。ただ、それ故にこそ、この嫉妬深い世界の綴り手には肩入れされている。それだけさ。しかし、彼女のように無能でもなく、非才でもない人間ならば、神に祈るまでもなく、奇跡にすぎるまでもなく、必然なる結果で大事を成せる。そう……本当に彼女は俺なんかとは違うんだよ」

「……あ、あの……それって……」

思わず、口を挟むフウルウ。

そこで、アルⅡイクシルはようやく己の言説にハツとしたらしい。突然慌て出した。

「か、勘違いするなよ。お、俺は別に彼女のことなんて、何とも、いや、勿論、探究士としては評価しているし、尊敬もしているぞ。だけど、いや、その、俺は彼女と幼馴染だったし、だから、と、とにかく、そんなんじゃないんだからなっ！」

何故か顔を真っ赤にして妙な弁明をする白衣の賢者。フウルウの脳裏には——ツンデレ？

とか、デイナーザードがしばしば語る妙な概念が思い浮かんだが、必死になって弁明を続けるアル・イクシルの勢いに口に出すことは憚られた。

一方のアル・イクシルは猛烈な語気で語り続けていたものの、さすがに落ち着いてきたのだろう。ひとまず息を整えた。

「ま、まあ、いいさ、繰り返すことになるが阿翦は沈黙している。君がいかなる妄想をしようとも、否定も肯定もできない。僕は君の頭の中身を疑うがね」

「頑固ですね」と、フウルウもまた呆れを隠さなかった。「まあ、この意見の違いは、あなたは女媧娘々を見て女媧娘々を判断し、私は女媧娘々の娘を見て女媧娘々を判断している点に由来するのでしょうか」

「ほう——なら、僕の方がより真実に近いのでは？」

「それは短絡的です。あなたも言っていたではありませんか？ 鶴は女媧娘々の意思、あるいは遺志を、より練磨し、より純化し、より高度な状態で抽出した存在だと。ならば、鶴は女媧娘々本人よりも女媧娘々の本質を表しているといえるのではないのでしょうか？」

「鏡に映った己は己よりもより己である……か」

「模造品こそ真正品の本質であることはしばしばあります。それに……」フウルウは本音をこぼした。「鶴への教育上、こちらの方が好ましいでしょう」

「なるほど、結局、君はそれがすべてか？」

皮肉な口ぶりのアル・イクシルに、思わずフウルウは紅顔した。照れ隠しに大局論を語ってみる。

「しかし、それらの技術、部分的でもいいから、一般化できませんかね？ いえ、その技術ではなくても、傀儡としての私、《夔》を利用した莫大な鶴の干渉力、どれ一つとっても、人類社会にとって、大いなる財産ですよ」

すると、アル・イクシルはきよとんととして、「さつきから気になっていたんだけど、《傀儡》って、どういうこと？」と問いかけた。

「は？」

フウルウは戸惑った。しかし、よく考えれば、この辺りのことは何も話していない。フウルウは彼が事態をすべて把握しているように思っていたが、それはアル・イクシルが己の知性と知識を最大限に活用しているだけで、彼の持っている情報自体は、それ程、自己と差があるわけではないのだ。

——……これこそが流浪の四仙《白衣の賢者》の真価というわけか……。

あの《杖》も《魔術》も、所詮は奇跡の類に過ぎない。彼はそんなものに頼りきる男ではないのだろうか。

「あの、今の『傀儡としての私』のところだけ、忘れてください」

とりあえず、フウルウは言ったもののアル・イクシルは不満そうだった。だが、「後でゆつくり、説明します。話が逸れると切りがありません」と、頼み込む。

アル・イクシルは「なんだが、僕ばかり手の内を見せて、不公平な気がするんだよね」とぶつぶつ言いながらも、言葉が続けてくれた。

「結論から言うと困難だろうね。多くの技術革新が必要だし、それが詰まっていた魔女の頭はもうないし、いかんせんそのすべてを支えていた精霊密度が今では低すぎる」

「がっかりする一方、これでよかったのかもしれないと思った。どれ一つとつても、これらの技術のもたらす結果は大きすぎる。例えば、人類が『古い』を忘れたら……」

「そしてフウルウは愕然とした。今、自分は根拠もなく、革新を忌み、変化を嫌った。あの故郷の老人たちのように……」

「——俺は墮落したのか？ 老いさらばえたのか？ それとも、年輪を重ね、成長したのか？」

「……成長だと思いたい。人の気持ちが変わるようになった分……」

「大体、何のために僕がここで地道に農薬の研究をしているんだ？ 精霊に頼りついているこの世界が歪だと思っからさ。実際、『精霊が減った』というだけで、できなくなったことが山程ある。だから、いずれ消え去る力に頼らない技術体系を築くため、そしてその優れた技術の土台には豊かな社会が欠かせず、それにはまず飢えることのない農業があつてこそだと確信しているからだ。明日の飯を心配している限り、学問に身は入らない。あの魔女のような鬼才の影で、学ぶ機会を与えられなかったために文字も知らず死んでゆくものがある。たまたま豊かな両親に恵まれ、学ぶ機会に恵まれたというだけで、教本なしでは初歩の微積分すらままならぬこの僕が賢者扱いされている。これは眠っている人的資源の証明だ。大体、遺伝子操作すらできるようになっていのに、文明水準、生活水準がこの程度というのはどう考えてもおかしいだろう？ 何でここまで一部の学問が発達しているのに、この社会はやつと神権政治から脱却したばかりなんだ？ 僕はね、《精霊がいけない世界》を見てきたから、その辺りが……」

「ちよつと待て！」フウルウは己の苦悩と彼の論述を中断させた。「また、とんでもないことを口走りましたね？」

「いや、あのね、そのね」急にアルルクシルは何故かもじもじして、「このこと、あんまり話したくないんだよね。話すことも少ないし……」

「だって、あなた、あの伝説の《地球》に行つたんでしょ？」

アルルクシルは背中を向けた。そして、身体を縮めて、もじもじしだす。

「それがね……どうもね。時間加速係数の設定をね……しくじつたみたいなの……」

「は？」

「いや《魔術》が使えるようになって、行動の自由も確保できて、早速向こうに行つてみて、感激したんだ。それで、よし、一度、戻つて、準備を整えて本格的に旅行してみよう。」

と、帰つてきたら、《この星》では百七十年ほど経っていたの」

「……じゃあ、あなたは女媧娘々と違って……」

「……そう。単に実験に失敗しちやつただけ。おまけにこっちの精霊密度がこの二百年ほどで思いっきり減っている。向こう側は精霊がない。《魔術》は《巫術》とは違うけど、発動条件には精霊が必要なんだ。だから、もう前みたいなのはできなくなっている」

「なんだそれは——と、フウルウは啞然とした。つまり、この男の間抜けのせいで、人類の大躍進は失敗したということか……」

「だから、歳も見た目通りだし、長くてもあと五十年くらいで、老いて死ぬと思う。ああ、僕も阿翦みたいに長生きしたいなあ……」



——おまけに俗物だし……。

「ま、まあ、魔術なんて、どうせ、僕みたいに特定の人間にしかできない。一般化できない、普遍化できない、大して意味のない力だったということさ」

——すぐ、欺瞞に走るし……。

フウルウはわかってきた。要するにこういう男だから、鵠は彼のことを認められず、女媧娘々は……。

カランカラン——と、その時、突如木板のぶつかり合う音が響いた。

それは小屋の方から鳴っている。すぐにアルⅡイクシルは小屋に駆け寄りながら、探査巫術を発現させ始めた。

おそらく、これが『警報装置』なのだろう——とフウルウはアルⅡイクシルの後を追いつながら、気付いた。

アルⅡイクシルは小屋の中に入ると、大量の歯車で構成された両手で抱えるほどの木製機械を引っ張り出した。どうやら、この木製機械の歯車の組み合わせと、探査巫術の併用で、闖入者を割り出すのだろう。もっとも、歯車の組み合わせが表すらしい暗号はアルⅡイクシル独自のモノなので、フウルウにはさっぱりである。

「誰だろう？　なんだか随分大勢だし、動きも変だ……戦闘体制を取っているのか……しかし、その割にはこちらの警報装置を回避しようとしていない……」

ぶつぶつ呟いてくれるのはおそらくフウルウに聞かせるためだろう。それを承知したフウルウは己の考えを示した。

「《アルⅡイクシルの手先》ですかね？」

「は？」アルⅡイクシルはきよとんとした。

「……やはりご存知ありませんか……」

「……ご存じないと思っている相手の手下がどうかしたの？」

「では、《再生への導き手》ですかね？」

「あの連中まだいたの？」今度はちよつとまともな対応だった。

どうやら、アルⅡイクシルは《再生への導き手》については知っているらしい。まあ、彼の本来生きた時代と境遇を考えれば、当然の話だ。では……。

「では、ラシード・イブンⅡムハンマドという男はご存知ですか？」

「ラシードさん？　ああ、あの人は尊敬に値する方だと思っただけ……それが？」

アルⅡイクシルは当然の如く答える。それでフウルウは現状の概要を掴んだ。

だから、フウルウは手短に自分の推測と状態を語る。すると、アルⅡイクシルは「ああ、それは十二分にありうる事態だよ」と賛同してくれた。こうなると、アルⅡイクシルの決断は早い。

「よろしい。《アルⅡイクシルの手先》は僕が何とかしよう。君は彼女を守るためにも《再生への導き手》のところへ向ってくれ」

「はい。私には彼女の位置がわかりませんから。しかし、正直、私と彼女だけでは戦力に不安が残ります。できれば、《アルⅡイクシルの手先》を……」

「うん。ついでに《アルⅡイクシルの手先》を対《再生への導き手》戦へ誘導しよう。ラ

シードさんにはかなり酷な思いをさせるが……」

「……無血では済みませんか？」

その沈痛な言葉は相手にとりより自身に対する問いかけであった。それがわかっているのだらう。アル・イクシルは「彼女の状況は？」とだけ返した。

「……よくありません。時間との勝負になるかもしれません。それと一筆したためてもらえますか？」

「わかった。でも、その前に」

すると、アル・イクシルは賢者の証たるその白衣——純白の外套をすつと脱ぎ捨てた。男性にしては細い肩が再びあらわになる。そして、脱いだ外套をあのか跡を引き起こした杖にぐるぐると巻き付ける。

そして、無垢なる純白で包まれた《カムヌ》の杖をフウルウに差し出した。

「……これはあなたが持っているべきでは？ 先程の力なら、《再生への導き手》<sup>サラーフ・アルムイード</sup>など鎧袖一触では？」

奇跡も全能ではないようだが、それでも彼の勝利は揺るがないだろう。

何しろ、あの光の前では『一足す一が二になつていなかた』<sup>二</sup>気がする。五つの大麦麵麩<sup>パン</sup>と二匹の魚を五千人の男で分けて、腹一杯に食べて、余った麵麩<sup>パン</sup>を集めると十二の籠が一杯になる——そんな矛盾に満ちた世界を『顕現』させそうな勢いだった。

だが、そんな奇跡の使い手も首を横に振った。

「それは僕も考えただけど、《神憑り》の条件が整うかどうかが怪しい」

「どういうことです？」

「心理的な問題さ」

「……俗世の争いに巻き込まれたくない——と？」

アル・イクシルは「君も人が悪いな」とそういった部分もあることを認めた。

「しかし、それ以上に、ね……ほら、覚悟はしていたから、最初は落ち着いていたけれど、いざ、現実を突きつけられると、じわじわ来るんだよ、これが……」

その脚は震え、その腕は己の身を掴み、その眼には涙が浮かんでいた。

「ごめん、正直立っているだけで精一杯なんだ。彼女が死んだことを受け入れるにはもう少し時間がかかる。すべきことは確実にする。でも、ごめん」

鶴に殺されそうになっても、アル・イクシルは平然としていた。

あれは——彼が人ならざる力を得ると共に、人ならざる思考形体をも得たのでは——とも勘繰っていた。

しかし、あるいは、彼が彼女のいない世界に未練がないからなのかもしれない。

「依存だったんだよなあ。あいつを乗り越えることを目標にするというのは……こういう肝心な時に何も出来なくなる」

そして、彼は崩れ落ちた。

\*\*\*

「見つけたぞ。とうとう追い詰めたぞ。黒衣の魔女！」

ずらっと鶴を取り囲んだのは、あのラシードとかいう連中だった。

「賢者様のお住まいまで、あと僅か——ここから先には一步も通さん！」

彼らには皆決然たる意思が漲っていた。装備も以前よりも充実し、陣形も頑強なものになっていた。手合わせ一つしていないが、彼らの練度と士気の高さは疑う余地もない。

そして、対する鶴の態度は「もういいですよ、どうでも……」というものだった。

「……は？」

「好きにして下さって結構ですよ……」

そう言って、鶴は地べたに座り込んだ。

「お、お前、どうしたんだ？」

あからさまに戸惑うラシード。周囲の空気も一気に弛緩するのだが、最早、鶴にはそれを隙と考えるだけの気迫がなかった。

「別にどうもしませんよ。大体《アル||イクシルの手先》に話すことなどありません」

「いや……そう言われてもな。こちらとしては、貴様を尋問しないわけにもいかんし……」

そこで、ラシードは思いついたらしい。「ああそれと、確かに我々には賢者様——アル||イクシル殿をお守りせねばならない恩義と義務がある。だが、我々は《アル||イクシルの手先》ではないぞ」

すると、ラシードの部下の一人が「隊長、別にいいじゃないですか、呼び名なんて、どうでも。さつさとこの小娘ふん縛りましょうよ」と口を挟んだ。

「しかしなあ、《アル||イクシルの手先》ではまるで特定個人の私兵ではないか。我々は公務に勤しむべき集団であり、その守るべき対称に順位はない」

「そりゃ、そうですけど、別に賢者様を多少持ち上げたところで、うちの街で文句付ける奴はいませんぜ。俺もあの方の刃サイとなれるなら本望ですし」

「大体、賢者様に一番感謝しているのは、隊長じゃないですか？」

「いかん。いかんぞ。上に立つ身である私に個人的な恩があるからこそ、なお、一層慎まねばならんだ。規律の乱れは常にそういうところから始まるのだ」

「えー、でも、あたしはあの人の個人的な手下っていうの、悪くないですよ。お金あるし、優しいしー。まあ、顔と歳が難点ですけど」

ちなみに最後に語ったのは、この集団の中では珍しい若い娘だった。無性に鶴の苛立ちが募る。あいつが若い娘に優しいのだとすれば、それは下心に違いないと警告すべきだろうか？

「隊長だって、実はまんざらじゃないんじゃないんですか？ 《霊薬の刃》サイラシード——なんて、かっこいいですよ」

「むむ、たしかに……」と、ラシードは薄っすらと頬を染めた。

だから、思わず鶴は口に出してしまった。「あなたも、あいつの方がいいんですね」と。

「……は？」

「唇と唇の接吻なんて、わたしだってしてもらったことないのに……」

「……お前さん、本当に何を言っとるんだ？」

「どいつもこいつも……そんなにあんな男がいいんですか？」

どうやら、以前と違い、問答無用での戦闘突入はないと考えたのだろう。ラシードが目配せすると、一味は一斉に構えを収める。そして、

「当然だ。あの方はファラーシャやマルジャーナマを死神の手から救ってくださったのだ」と、ラシードは涙を流さんばかりに語る。ファラーシャやマルジャーナマって、誰ですか？——と鶴が尋ねようとすると、彼の部下の一人が助け舟を出した。どうやら、彼の愛する妻と娘のことらしい。

「二年ほど前になるか、この《乙女の泉》で猩紅熱が流行したことがあってな」

「猩紅熱……しかし、そんな話は……」

猩紅熱が発生すれば、必ず騒ぎになる。たしかに鶴はこのアツザフル帝国の事情に疎い。だが、それでも猩紅熱が流行っていたのなら、確実に耳に入る。猩紅熱程の厄介な病なら、皆が隔離政策を取りたがるからだ。猩紅熱が鶴のような子供へ特に感染しやすいことを鑑みれば、なおのことだ。しかし……。

「聞いていないだろう？ 話題になる前に、偶然立ち寄られた賢者様がたちどころに薬で事を収めてくださったからな」

「ちよつと待つて下さい。それって、彼が猩紅熱の特効薬を開発したということですか？」

「いや、猩紅熱だけではない。あの薬は淋病や破傷風など、細菌が原因となる数多の病に効く。言わば、人類の宝。まさに《万能の霊薬》だ」

大仰に振舞うラシード。

ただ、アルリックシルは『元々は趣味の悪い知人の遺産なのです』とよく訳のわからないことを言ったらしい。そして、鶴にはその意味が理解できた。毒と薬は常に紙一重、表裏一体の関係にある。往々にして薬とは、人間にとっての都合の悪い存在（この場合は有害細菌）にのみ働くようにした『限定された毒』だ。そして、おそらくアルリックシルは鶴の師母が進めていた毒の研究を薬の開発に流用したのだろう。

「細菌が原因となる数多の病に効く……もしかして、彼は青黴の類を培養しませんでしたか？」

「おお、その通りだ。よく知っているな」

そこまで聞いて鶴は——細胞壁合成阻害剤ね——と推測した。

発想自体は昔からのものだ。古来より、病の者には青黴を練って飲ませる俗習がある。元々青黴に他の細菌との生存競争を有利に進めるために、体内で独自の細胞壁合成阻害剤を生成する特徴がある。この細胞壁合成阻害剤は細胞壁を持つ細菌の類を殺しまくる。要するに猩紅熱や淋病、破傷風の元凶を皆殺しにするのだ。その一方で、一応、細菌壁のない真核生物たる《動物》には無害なわけだから、ヒトには都合のいい『限定された毒』である。おまけに青黴自体は黴毒の類と無縁なのだから、薬としてはもってこいだ（この具体的な作用原理は鶴の師母が解明したものである。だが、過去の人間も経験から、真理に近いところにまでたどり着いていたのだろう）。

もつとも、それだけではラシードの語るほどの成果は挙げられない。だから、鶴の師母の研究もそこで中断されている。アルリックシルはおそらく独自の研究開発を進め、効率よくその細胞壁合成阻害剤を生成する方法と、それを効果的に人体に投入する方法を考案したのでらう。

「あれはまさに伝説の<sup>アルリックシル</sup>霊薬。故に我々はあの方をアルリックシル殿とお呼びさせていただいているのだ。まあ、御自分では謙虚にも《愚か者<sup>マジヌーン</sup>》と呼んでくれと言われておられるが——その慈性と知性、そして、品性は奇しくも同じ二つ名<sup>ラカブ</sup>で呼ばれる伝説の

アルリアム・ムラト・アヤド

白衣の賢者にも劣るまい」

「とうるか、本人なんですけどね」

「何か言ったか？」

「いや、どうでもいいですよ」

ラシードは怪訝な顔をしながらも説明を続けた。どうやら、説得のつもりらしい。アルイクシルが立派な人間であることを示せば、鶴の蛮行を抑えられるかも知れないと考えているのだろう。

……当初、アルイクシルはこの画期的な新薬を使うことにあまり積極的ではなかった。十分な実験を行っていないという点で、大変尻込みしたそう。新薬が効くとは限らず、あるいは新薬作成に必要な労力を衛生管理や栄養補給などに用いたほうが有益かもしれない。

ただ、目の前で猩紅熱の患者が死を待っているだけの状況を見せ付けられては、躊躇う気持ちも吹き飛んだらしい。猩紅熱で多くの人間が赤い発疹と共に死んでいくよりは、アルイクシル《万能の靈薬》を使った方がいいと考え、そして、それが成功したのだ。勿論、救えなかった命も多い。だが、それでも……。

「ファラーシャやマルジャーナマを賢者様は死神の手から救ってくださったのだ」と、涙ながらに同じ言葉を繰り返した。

「……」

なるほど、これならラシードがアルイクシルを『賢者様、賢者様』と敬うのも無理はない。

勿論、アルイクシルに感謝したのはラシードだけではない。数多くの命を救い、しかも、アルイクシルは『僕は患者を実験台にしたも同然ですよ』と、薬代を受け取らない。《乙女の泉》の多くの者にとって、彼は紛れもない英雄だった。

ならせめて、何か別の形でお礼を、と言われたアルイクシルは『それじゃあ、遠慮なく』と、《乙女の泉》の中で周囲から隔離され、農業実験等に適した第十三地区八番地――すなわち、この土地を格安で買い取り、『危ない実験もするからなるべく近づかないで』と、頼み込んだ。

「……ボロが出る前に距離をとったんですよ、あの男のことだから」

「は？」

どうせわかるまいと鶴はあえて語らなかった。

病が流行れば医者が必要だが、病が収まれば医者は不要だ。あるいはアルイクシルの手に負えない病が、出現した時、無闇に頼られても困る。どうせ、そんなところだ。第一、あの男も人付き合いが下手な類である。これがフルウさんなら、全力でぶつかって、解り合おうとするだろう。その結果、離れていく者もいる。だが、集う者もいる。故郷での政争党争とやらも多分そんなところだ。ところが、アルイクシルにはその度胸すらない。他者に嫌われるのが厭だから、常に曖昧で温厚な態度をとる。だが、それ故に内心を吐露し合える程の絆を築くこともまた少ないのだ。

……こんな時でも、ピヤオ・フルウを思い出してしまった自分が情けなくなる。

また泣きたくなってきた。

「お前本当にどうしたんだ？ 恋人とうまくいかない上に、何故か父親までその恋人の肩

を持って、二重にぎやふんて感じだぞ？」

「もう放つて置いて下さいよ」

「そんなわけにいくか……あ、そう言えばあの男はどうした？たしか、ピヤオ・フウルウとかいったか？」

「……」

「もしかして、喧嘩でもしたのか？」

「……」

だんまりを決め込むというか答えようもない鶴。ラシードは本気で困った顔をした。

「おいおい、しっかりしてくれ。彼の居場所はこちらでも確認していないんだ。あのまま水死体になっていたら、目覚めが悪すぎるぞ」

愚痴をこぼすラシードに、部下の一人が「隊長、ここは……」と窘めるようなことを言った。

「ああ、そうだな。とりあえず、警邏所まで来い。ちよつと歩くが、茶の一杯くらいは出してやれるし、住処がないなら提供してやっても構わん」

「グスっ……あなたは意外といい人ですね」

「私は警官として職務を遂行しているだけだ」

「……警官？……あなたたち、もしかして、ただの警察ですか？」

「……お前、今まで我々を何だと思っていたんだ？」本気で呆れ顔をするラシード。

「《アル||イクシルの手先》」

「ああ、そうだったな」とラシードは苦笑した。「我々はこの《乙女の泉》の治安維持を担当している帝都警邏隊外郭第六〇八部隊。私は隊長のイブン||ムハンマド。……というか、何度か説明しなかったか？」

「はい。聞いた覚えがあります」鶴は素直に頷いた。「でも同時に《アル||イクシルの手先》なのだと思います。警官でありながら、裏でアル||イクシルの私兵として悪辣非道な残虐行為を繰り返す……という類かと……」

「何故、そうなる！ 先にも述べたが、我々はアル||イクシル殿の私兵ではない。それに非合法的な活動は我々も賢者様も望まん」

「だって、いきなり巫術でこつちを吹き飛ばそうとしてくるし」

「それはお前だろう！ 第一、我々の中にそんな強力な巫術師はいないぞ！」

ここに来てようやく鶴——そして、おそらくはラシードも——お互いの話に食い違いがあることに気が付き始めた（フウルウなら『遅い』と嘆くだろう）。

「……試みに問いますが、一ヶ月ほど前に雪山の中でわたしに雷撃系巫術で襲い掛かっってきたのって、あなた方の一味ですよね？」

「知らん。報告もない。その頃、私はこの街に向かうために船の上だ。不在証明は山ほどある。そもそも、雷撃系巫術を使える奴なんて、今時そうはおらんぞ。それこそ、

《再生への導き手》ぐらいしか……」そこでラシードに思い当たることがあったらしい。

「そういえば、あのピヤオ・フウルウという男が《再生への導き手》云々を語っていたな」

「それはあたくしたちのことですわ。汝妹命」

\*\*\*

突如その場に表れた少女は、鶴——と呼ばれる変な小娘のことを『なにもなして汝妹命』と呼んだ。年の頃はその鶴と同じだろう。ちようど第二次性徴が始まったばかりといった容子だ。透き通るような——それこそ、血管が見えるほどの美しい白の肌。

照り映えるような——この森の中では一際目立つ輝く銀の髪。さらに、あの大鎌の眼球と同じ黄昏時の日輪に似た赤い双眸。

そして、それらをさらけ出した少女だった。この木々の茂る中には相応しくない半裸と、いつてもよい姿であった。何しろ、身に付けている衣は、たった一枚の白い布切れだけなのだ。たしかに、簡素だが上品で清潔そうな布だったが、肌を覆い隠すには明らかに面積が足りない。胸のわずかな膨らみや股の間といった最低限のところを隠せるか否かという程度だ。それも適当に巻き付けているだけなので、ちよつと動いただけですり落ちてしまうこと請け合いだ。いや、それ以前に厚みが足りないために、今にも肌が透けて見えそうだ。その癖、宝石の類を装飾品として、体のいたるところに身に付けている。

白と黒。華美で露出が全開な少女と、素美で露出が皆無な少女。

このいきなり出てきた少女は、ようやくラシードたちが追い詰めた変な小娘と、対照的な存在だった。

その鶴の方に目をやると、黒衣の少女はやけに表情を引き締めていた。ついでに、部下で唯一の女性であるナディアは何を考えているのか、頬を染めていた。

——娼婦の類か。それにしては幼過ぎるようにも思えるが……。

しかし、ナディアのような幼女趣味も世の中には少なくないだろうから、それなりの需要があるのかもしれない。それに、そうでなければ、あんな露出度の高い格好をしている必要はない。肌の美しさからいって、貧しさ故に服が買えないということもありえまい。

とはいえ、この辺りでは見たことのない顔だった。幼いながらも、これ程の嫣然たる美貌である。『お堅い』と評されるラシードの耳にも噂ぐらいは入ってきてもいい。それにあの宝石は安物ではない。ラシードはさほど宝石に詳しくはないから、本物だとは断言できないが、そんじよそこの娼館で用意できるようなものにも見えなかった。

奇妙だ。第一、何故、この少女はこんな山中にいるのだ？ それにこんな森の中にあんな格好で入ってきたら、せつかくの綺麗な肌に傷がつくことが確実だというのに……。

——巫術か何かで、虫除け等をしているのか？ では、あの宝石は精霊結晶……巫術？ いかん！

まだ、鶴が危険かもしれないと考えていたのだろう。部下の一人——お人よしのイーサーが「こら！ 子供がこんなところに来ちゃいけない」と駆け寄った。

「待て、うかつに近づくな！」

ラシードの制止は間に合わなかった。

『近寄るな、下賤』

「え？」

その瞬間、爆音が轟き——そのイーサーは爆ぜた。

何が起きたのか、すぐに理解したものはいなかった。ただ、飛び散ったイーサーの四肢と臓物だけが、何かの爆発が起きたのだと証明していた。

あまりにもあっけなかった。お人よしのイーサー。お世辞にも有能とは言い難い男だったが、まだ若く多くの可能性を秘めていたイーサー。格闘訓練で中々眼を瞑る癖が抜けなかったイーサー。臆病で、暴力を振るうことを極度に躊躇っていたイーサー。未熟さよりも先に、その優し過ぎる性根を問題にして、何度も転職を勧めようとしたイーサー。やはり、さっさと警官を辞めさせておくべきだった。

そのイーサーの首が胴から離れて地面に転がっていた。

当初、その原因を鶴に求めたが、彼女は首を横に振った。この鶴とか言う少女にラシードはまったく信頼を置いていなかったが、少なくとも今の爆発に関わっていないことは明白だった。

今精霊を動かしたのは、鶴ではなく、あの半裸の少女の方だったからだ。

どういう理屈かはわからない。あの半裸の少女は言霊も祝詞も用いてはいない。せいぜいが、『近寄るな、下賤』の一言が言霊として機能したのだろうか、しかし、たったあれだけの言霊で、どうして、あれだけの威力を出せる？

「汚らわしい」

半裸の少女の玲瓏なる声が響いた。

そして、半裸の少女はイーサーだったものの首を蹴飛ばす。

その行為で部下たちに憤怒が満ちたが、ラシードは「まだ動くな。伏兵がいる」とそれを押し留める。

「一度だけ言う。我は聖娼シャムハト——アトラハシスの巫女。卑しき奴やつこが近づくことは許さぬ」

綺麗な綺麗な標準語フスハルだった。あまりにも優雅過ぎて、ラシードの部下たちにはその意味が伝わりにくかったかもしれない。

そして、森の奥からゆらりゆらりと人影が現れる。

どうして、ここまで接近されているのに気付かなかったのかは不思議ではなかった。おそらく、それだけの訓練を重ね、さらに巫術で補っていたのだろう。人数は把握し切れていないが、おそらく、こちらとほぼ同数——十二人。しかし、向こうはおそらく全員が巫術師だ。《聖娼シャムハト》とやらと同じ姿の——同じ能力を持っているであろう者がいないのが救いだ——。

「対巫術師戦の用意を！殺傷性攻撃を無条件で許可する！」

ラシードの声と共に一斉に陣形を変え、武装を変える。

だが、正直、望みは薄い。

あの《聖娼シャムハト》とやらは自分を『アトラハシスの巫女』と呼んだ。ならば、彼女は精霊復活主義者《再生サライフ・アルヒムへの導き手》の長サライフ・アルヒムアトラハシスへ直々に目通りが許される《巫女》ということになる。

——あのピヤオ・フウルウが言っていた《再生サライフ・アルヒムへの導き手》とはこいつらのことだったのか……。

後悔が募る。

一応、ラシードたちも対巫術師戦の用意をしてきたが、それはこの鶴という少女一人を



相手にすることを前提にしてのものだ。巫術師の集団を相手にすることを想定していない。それも《再生への導き手》でも上位の巫術師たちが相手では……。

そもそも、あの《聖娼シヤムハト》とやらだけが相手でも勝てそうにない。この鶴とかという少女はたしかに尋常ならざる巫術師である。訳のわからないくらい強力な巫術と、さらに訳のわからない『闇色の大鎌』を装備している。巫術師としては《聖娼シヤムハト》よりも鶴の方が上だろう。だが、鶴は祝詞を紡ぎ言霊を唱えるという巫術師としての常道は守っていた。そこにラシードたちの付け入る隙があったのだ。しかし、これでは……。

するとその鶴がラシードの前に進み出た。ちようど、ラシードとあの巫女との間に立つ状態になる。

助かった——と、ラシードは思い、その直後にそんな自分を恥じた。

しかも、鶴はその途中でとんでもないことを囁いていった。

『すいません。今のわたしは消耗が激しすぎてほとんど巫術は使えません』——と。

どういうことだ？ いや、それなら、どうするのだ？——ラシードはよっほど言い返してやりたかったが、何とかそれをこらえて鶴の背を見送る。

「私のことを『汝妹命』と呼びましたね。私にあなたのような姉妹はいないはずですが？」

「いいえ。あたくしはあなたの姉妹です」鶴の言葉には不思議と彼女は柔らかに答えた。

「不思議に思っているのでしょうか？あたくしが言霊も祝詞もろくに用いずに、どうして、これほどの巫術が使えるのか？」

「……三つの可能性があります。一つはわたしと同じように神憑りを使っている。もう一つは無発声式言語巫術を使っている」

「汝妹命はわかっているはずですよ——その双方がありえないと」

「はい。その双方ともが干渉紋で識別できます。神憑りの場合は、当人の身体よりも周囲に構築された擬似人格精霊の方へ干渉紋の中心がずれるのが特徴です。無発声式言語巫術の場合は発声器官を用いていないことを除けば通常の言語巫術と変わりませんから、通常の言語巫術とほぼ同じ干渉紋が発生するのが特徴です。しかし、この干渉紋はむしろ……」

「そうです。これがあたくしの観念巫術です」

「馬鹿なっ！」思わずラシードが声を上げる。「ただの観念巫術であんな出力が出るものか！」

『黙りなさい、卑賤』

その巫女の透徹した一言で巫術が発現する。

気配を悟ったラシードは反射的に体を横に倒した。その直後、ラシードが立っていた空間に雷光が走る。

走る動揺。ラシードは「隊列を崩すな！」の一喝で何とか抑え込む。

巫女は「あら」と感心したようであったが、ラシードにはまるで余裕はなかった。今の一撃を躲しきったわけではない。利き腕に猛烈な痛みが走っている。おそらく、雷光が掠めたのだ。

——まずい。

第二撃が来たら絶対躲せない。今の回避とて、ほとんど偶然の産物である。直感的にした上で、重力を用いた人間工学的に最速の回避運動をとった。それでも、躲しきれないのだ。弓矢の類ならば、盾で防げるが、巫術はそうとは限らない。しかも、今この中で最

も対巫術防御に秀でた者は、よくわからないが消耗している。

その鵺は動揺の色を見せずに、巫女に語りかけた。

「先程の姉妹という言葉——あれはわたしとあなたが同じ計画の上で誕生した存在である……という意味でしょうか？」

一方の巫女は鵺が自分に近づいて来たことに喜色満面だった。年頃の小娘のようににはしやぎだす。

「そうですね。あなたの創造主たる女媧娘々は、減衰していく精霊の力に対応するためにも、二つの方策を考案しました。一つはあなたの用いる《外部演算因子との情報共有による人格構築型連鎖性精霊干涉法》——いわゆる《神憑り》カムガカリです。これは言わば一人が同時に操る精霊の数を増やそうとする手法ですね」

「もう一つの手法があなたの莫大な干涉力のからくりというわけですね？」

「はい。その通りですわ、なにもみこ汝妹命」小鳥が囁くように幼い巫女は説いた。「言わば一人が一度に引き出す精霊の力を増やそうとする手法です」

「……精霊使役に魂を最適化しているが故に俗人とは異なる思考形態を具える事になった存在。その代償として恒常的に強大な干涉力を纏う巫覡。それ故、今のように観念巫術でも、自在に精霊の力を引き出せる——滅んだはずの上古の貴人」

「ええ。あたくしは神々の憑坐となるためだけに、産み落とされ、育て上げられました。だから、俗物どもとは価値観が異なるようですよ」

「精霊が人間に合わせるべきである、人間が精霊に合わせるなど媚態である……って、お師匠様が仰っていました」

「媚態——それは女媧娘々が女としての悦びに疎い故の言葉でしょうね」

「お師匠様を侮辱するつもりですか？」裂帛の語気で問う鵺。

「まさか。女媧娘々の基礎理論があったからこそ、なにもみこ汝妹命もあたくしたちは産まれたのです。感謝していますよ。ただし、なにもみこ汝妹命のような無支祈システムに固執するあまり、あたくしたちのような《憑坐》を企画段階で封印したのは惜しかったといえるでしょう」

「流用したのねっ。お師匠様の研究を……！」

「ええ、そのおかげであたくしはこの世に生れ落ちることが出来ました」

心底嬉しそうに胸元に手をやるアトラハシスの巫女。そこで、ふとその目にイーサーの亡骸が目に残ったらしい。

「しかし、やはり、男ではつまりませぬね。声に艶がない」そして、巫女は腕を伸ばした。

「『供物には若い娘が好ましい』」

次の瞬間、巫女の衣が伸びる。鵺が「招妖幡？」と呟き、反射的にその伸びてくる衣を避けた。どうやら、同じ巫術師なら、精霊の動きを読んでギリギリ躲せないこともないようだ——というラシードの認識は、しかし、甘かった。

「い、いやあああああっ」

巫女の伸びた衣は触手のように蠢き、『若い娘』であるリディアの手足に絡み付いていた。

そして、手足を拘束したりディアの体を軽々と持ち上げ、巫女の傍まで運んでいく。

——く、人質か。

そして、巫女はその手足をリディアの服の中に潜り込ませる。衣（十中八九、神御衣）を触手として伸ばしている分、肌を覆う部分はますます小さくなっていったが、巫女は気

にも留めない。この場にいる庶人など恥じらいの対象に入っていないのだろう。

「い、いや」

リディアの屈辱など気にも留めず、巫女は彼女の首に舌を這わせる。そして、その細い腕を彼女の服の中で絡ませる。左手は胸元へ、右手は股間へ……。

「ひんっ」

「あ、処女ではないのですね。駄目ですよ、あたくしのように貞操はきっちり守っておかないと」

鵺がさらに一步前に出た。「何が目的です？」

「勿論汝妹命なにものみことの確保を、です」

「認めん」と、ラシードが苦渋の思いで口を挟んだ。「彼女もそれを望んではない」

鵺が非難の眼差しをラシードに向ける。だが、それよりも早く巫女は対応した。

「そうですか……ではやむを得ないですね」

しゅるりしゅるりとリディアを拘束していた触手の動きが変わった。ぎりぎりという音に変わり、みしみしという音に変わり……。

「あっ、がっ、ヒヤ、ギイ、イイイイイイイイイイ！！」

リディアの手足が次々とありえない方向へと曲がっていく。肉が裂け骨が折れる音が届くのだろうか——巫女は大きく目を見開いて、恍惚たる表情を浮かべる。リディアの絶叫が際どいものになると共に、服の中で動き回る巫女の腕もその激しさを増していくが、しかし、ある一点で、ピタリとその双方が泊まった。

「ヒギっ……！！」

それが白目をむき、舌を突き出したリディアの最後の言葉だった。

「……ああ、うまく達磨だるまにしようかと思っただんですが、苦痛で死んじゃいましたか……まあ、非処女にしては堪能させてもらいましたね」そう言って巫女はリディアの屍骸を投げ捨てた。「安心してください。これは死姦するなりまだ使い道がありますし、汝妹命なにものみことはもううまくやりますから、ね」

「……手足を砕いて、わたしを運んでいくと？」

「ええ、それに、あたくしはずっと妹が欲しいと思っていたんですの」巫女の頬が染まり、欲情の色があらわになった。「たくさんのお姉さま方に弄ばれるのも確かに悦びですが、そろそろ、あたくしも自分専用のお人形が欲しい年頃ですから」

そして、舌で己の唇を舐め回す巫女。

ラシードは理解した。

この鵺と名乗る少女が、どうして自分たちに苛烈だったのかを。

この連中と自分たちを混同していたからだ。今まで、ずっとこんな連中に追い掛け回されてきたからだ。

こいつらの手を逃れるために、十を過ぎたばかりの少女がこいつらと同じ冷酷さと残酷さを身につける必要があったのだ。

だから、ラシードは部下たちに心中で謝って、鵺の背に声をかけた。

「おい、変な小娘……ここから、川沿いに下っていけば、そこに賢者様——マジユヌーン・アル・イクシル殿が住んでいらっしやる」

「……それって……」

「我々にさほど時間が稼げるとも思えんが、賢者様なら貴様の安全を確保してください。そこで事情が伝われば、あの方が街のことも考えてくださるだろう」

「ちよっと、待って……」

「これが互いにとっての最善手だ。……いくぞ、我らは<sup>サイフ・アルレイクシル</sup>《霊葉の刃》！ 全員吶喊！」

絶望に基づく恐怖。仲間の死による憎悪。それらを<sup>サイフ・アルレイクシル</sup>《霊葉の刃》の名の誇りで飲み込み、ラシードたちは巫女に向かう。

ところが、何を考えているのか、鶴はラシードの後を追ってくる。

それだけならよかったのだが、少女は「きゃっ」と間抜けにも自らの伸びすぎた髪に足を絡ませて、すっ転んだ。

——馬鹿！ 無意味に髪を伸ばすからだ。

そこに飛んでくる巫女の触手。先端が硬質になっており、明らかに刃の役割を果たしている。

反射的にラシードは転んだ鶴に覆い被さり、己の体を壁として少女を庇う。

そして——

そして——その刹那、純白が閃いた。

あまりにも白い白い、<sup>アルムラト・アブヤド・ムスマト</sup>無垢なる純白の外套。

その外套は、ラシードと鶴を覆い、刃からその体を守る盾となった。

見れば、対刃、対衝撃性を高めるために水を含ませている。こちらも神御衣なのだろう。

だからこそ、致命的な一撃を防ぐに足り、都合よくラシードと鶴を覆う動きを為し、活性精霊の証たるほのかな光を放っているのだ。

その白衣の纏い主は明白なはずだった。しかし、今の彼は未知の神御衣を羽織り、右手には藜を模した《杖》を携えている。故に、鶴とラシードはそれぞれの呼び名で同じ間違いを犯した。

「アルレイクシルっ？」「賢者様っ？」

しかし、彼は穏やかに正しきを語る。

「それは誤認です。私はアルレイクシル殿ではありません」

そうだ。以前とは決定的に違う決然たる意志を具えているが、間違いない。

双方が反応する暇もなく包囲を破り、一足にて少女の下に駆けつけ、そして、確実に見えた一撃を防いだ。

どれをとっても明らかに人間の限界を超えている。あの男だ。真正銘の化け物だ。

正体不明の自称歴史学者志望教師——ピャオ・フウルウだ。